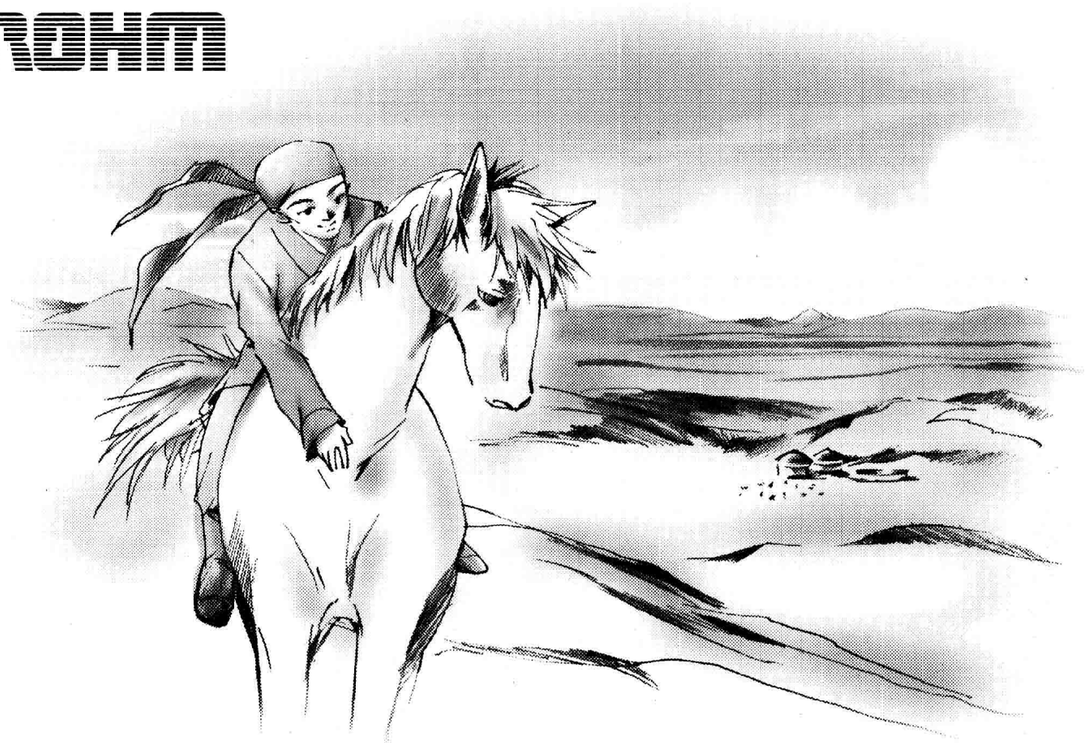
エレクトロニクスで社会に貢献する

ROHM



馬と人の友情が、心に響く物語です。

23 スーホの白い馬

（モンゴルの昔ばなし）

モンゴルに、スーホという貧しい羊飼いの少年がいました。
ある日、スーホは砂漠で死にかけていた一頭の白い子馬を見つけました。
スーホは心を込めてその子馬の世話をし、雪のように白く体が引き締まった立派な白馬に育て上げました。
しかし、年に一度の村祭りの競馬に出場した白馬は、わがままな王の目にとまり
嘆くスーホを残し、召し上げられてしまいました。
わがままな王は大勢の家来の前で自慢げに白馬にまたがりましたが、
そのとたん白馬は王を振り落とし、スーホのもとに逃げ出しました。
何本もの矢が射られ傷ついた白馬は、やっとのことでスーホのもとに辿り着き、
スーホに抱かれながら息絶えてしまいました。
その夜、「私の体を使って楽器を作りなさい。そうすればいつでもあなたのそばにいられますよ」と
白馬がスーホの夢の中で告げました。
こうして、スーホが完成させた『馬頭琴』は、人々の心を癒し、
またたくまにモンゴル全土に広がって愛されるようになりました。

ローム君の新・博物日記

世界昔ばなしを科学する

このシリーズは、半導体技術で世界に貢献するロームがお届けしています。おなじみの世界の昔ばなしの中から毎回テーマを一つとりあげ、そこに隠れているいろいろな不思議を科学の視点で見つめます。さて、今回のおはなしは…

馬は、人の情が分かる良きパートナー。

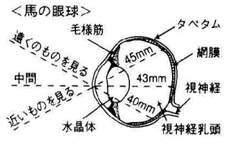
「スーホの白い馬」は、モンゴルの民族楽器として有名な「馬頭琴」がどうして生まれたのかを伝えるという話です。しかし、馬頭琴の由来にまつわる昔ばなしはこれだけではなく、「スーホの白い馬」は、生活のパートナーである馬に対する関心からまず作られ、馬頭琴に関するエピソードは後で追加されたものではないかと言われています。ところで、面白いことに日本の石垣島に、これとそっくりの「師番の赤馬」という話があります。海の中から現れたすばらしく足の速い赤馬が、師番という若者になつきます。殿さまは赤馬を自分のものにしようとしますが、逃げ帰って来て息絶えるという話です。遠く離れたモンゴルと日本ですが、どちらも馬は特定の人へ情をよせることができる動物として描かれています。

人と馬との良い関係。

日本での人と馬とのつながりは、約1500年前にさかのぼります。そういえば来年の干支は馬。西洋ほどではないものの、やはり馬は昔からなじみの深い動物です。しかし、かつて日本に150万頭いたといわれる馬も、今日ではせいぜい10万頭強が飼育されているに過ぎません。馬に実際に触れたり乗ったりする機会も少なくなってしまいました。現在一般的に目にする馬といえば、競走馬のサラブレッド。その競走馬の世界でも次のような結果が、ある調査で得られたそうです。それは、「馬と良い関係を作れていない騎手は、出走前の馬の興奮を抑えられない。そのため、馬は全速力で走るために必要なアドレナリンという神経物質を無駄に分泌してしまう」というもの。人と馬との良い関係。スーホと白馬の速さの秘密は、ここにもありそうです。

どうして馬はいつもお辞儀をしているの?

馬はこちらに近づいて来るとき、頭を上下させながらやって来ます。お辞儀してくれているのでしょうか? いいえ、ちがいます。「歩行のバランスをとるため」という理由もありますが、実は目の構造にもその秘密があります。馬の目は、眼球の水晶体(レンズ)の形を変える毛様筋が発達しておらず、焦点合わせが苦手。そのかわり、馬の眼球にはゆがみがあり、水晶体から網膜までの距離の差で、近くを見る部分と遠くを見る部分が分かれています(下図)。馬が草を食べているとき(止まっているとき)は、目の下部で食べている草を見て、上部で周りを警戒しています。しかし、馬が人に近づいてくるときは、人との距離がだんだん変化します。このときの頭の上下運動は、眼球の角度を常に変えるので、人に対する焦点の調節に役だっているわけです。でも、白馬の心の焦点は、いつもスーホだけにぴったりと合っていたようですね。



昔ばなし監修／昔ばなし研究所 所長　小澤俊夫
取材協力／JRA競走馬総合研究所　生命科学研究室研究役　楠瀬良

ローム株式会社
www.rohm.co.jp
本社／〒615-8585 京都市右京区西院溝崎町21
TEL(075)311-2121 FAX(075)315-0172
http://www.rohm.co.jp/

ゆめがあふれるあしたのために、LSIのロームです。

← 第22話へ
第24話へ →